	もくじ	今回 (#02) の内容
#02 関数 2022 年度 / プログラミング及び実習 III 角川裕次 ^{龍谷大学 先端理工学部}	第 6-2 節 関数の設計② 第 6-3 節 有効範囲と記憶域期間	小テーマ: 関数 第3回: 変数の有効範囲と有効期間 第4回: 静的/自動変数のメモリ配置
1/57 重要概念リスト	2/57 今回の実習・課題 (manaba へ提出)	3/57
 返却値型 void extern 修飾子 有効範囲: ブロック有効範囲とファイル有効範囲 関数原型宣言 (プロトタイプ宣言) ヘッダ (#include <stdio.h>など)</stdio.h> return 文 型修飾子 const 自動有効範囲 (auto) と 静的有効範囲 (static) 	実習内容と課題内容は講義途中に提示します (作成したファイル類は manaba に提出)	第 6-2 節 関数の設計
4/57	5 / 57	6 / 57

★重要★ □ 値を返さない関数 p.152 左下直角二等辺三角形の表示 □ 関数の汎用性 p.152 List 6-7 (部分): スター文字 (アスタリスク*) を n 回表示する関数 List 6-8: 指定の文字 ch を n 回表示する関数 List 6-7 (部分): 左下直角二等辺三角形の表示 void put_stars(int n) int main(void) void put_chars(int ch, int n) while (n-- > 0)int len; printf("左下直角二等辺三角形を作ります。\n"); while (n-->0)putchar('*'); putchar(ch); printf("短辺:"); scanf("%d", &len); for (int i = 1; i <= len; i++) { 動作内容は「表示」なので関数値を返す必要がない 任意の文字を指定できる: 汎用性あり put_stars(i); ■ 逆に汎用性が凄すぎると使いにくい場合もある 関数値を返さない関数 putchar('\n'); ■ 汎用性と特殊性 (専用性) の上手な使い分けが大切 返却値型 void を指定 return 0; put_stars の別実装:汎用的な put_chars を特性化 関数の実行を終了する方法: 2 通り 4を入力した時の出力 void put_stars(int n) ■ 関数の末尾に実行が到達する場合 ■ return 文を実行する場合 (返り値は無指定) put_chars('*', int n) *** **** ■ n回表示する制御ロジックを再び書かなくてよい 7 / 57 8 / 57 9 / 57 ★重要★ ★重要★ □ 仮引数を受け取らない関数 p.154 □ ブロック有効範囲 p.155 入れ子ブロックでの有効範囲 List 6-9 (部分): 正の整数値を読み込む ブロックの入れ子関係で外側の宣言の内で最も内側の宣言が有効 ブロック有効範囲 (block scope) int scan_pint(void) void foo(void) ブロック (関数など) 中で宣言された変数: int tmp; そのブロックを通用範囲とする (ブロック終端の)まで) int tmp; /*宣言1*/ do { printf("正の整数を入力せよ:"); 名前が同じでも別ブロックでの宣言なら別物 int tmp; /*宣言2*/ for (...) { scanf("%d", &tmp); if (tmp <= 0) int scan_pint(void) int tmp; /*宣言3*/ puts ("\ a 正 で な い 数 を 入 力 し な い で く だ さ い 。 "); ... /* ここで使用する tmpは宣言3のもの */ } while (tmp <= 0); int tmp; ... 略 ... return tmp; ... /* ここで使用する tmpは宣言2のもの */ ... /* ここで使用する t m p は宣言 1 のもの */ int rev_int(int num) 引数を持たない関数 int tmp; /*宣言4*/ int tmp = 0; 仮引数並びに void を書く ... /* ここで使用する tmpは宣言4のもの */ 略 呼出し:実引数を与えない 呼出しの例 有効範囲 (scpoe):変数が有効な範囲を規定する規則 ■ 有効範囲の規則はプログラミング言語ごとに異なる int nx = scan_pint(); 10 / 57 11 / 57 12 / 57



ソースコード中で関数を書き並べる順序 (2/2)	□ ヘッダとインクルード p.158	ヘッダのファイルはどこにある? (気にしなくて良い)
(教科書とは逆のことを書きます; 主観です) 教科書で推奨している方法: 呼び出す関数を後に書く ・コードの詳細部分から読まされる 300 行以上のプログラム読解は困難 ・実用的なプログラム開発には役立たない ・私はこの方法はすすめないです クイズの「これ何の写真?」 ・ 倍率 100 倍の拡大写真を見せる → 50 倍 → 20 倍 → 5 倍 → 1 倍 ・最後まで何か分からない: だからこそクイズとして成立 ・ 逆順: 一発で全体が分かる	Q. いつもソースコード先頭にある #include <stdio.h> って一体何? A. ヘッダ (header) をインクルードしています ライブラリ関数の関数原型宣言: 記述済みのファイルを予め用意 「ヘッダと呼ばれる printf, putchar,: ファイル stdio.h sisspace, isalpha,: ファイル ctype.h sin, cos,: ファイル math.h #include 指令でソースコード中に取り込んで利用 例: #include <stdio.h> Ifacのファイルの中身で include 指令を置き換え インクルード (include) とも呼ぶ</stdio.h></stdio.h>	(Ubuntu 18.04 など Unix 系 OS の場合) #include <>で取り込むファイル: ディレクトリ/usr/include の下 /usr/include/stdio.h /usr/include/ctype.h /usr/include/math.h #include "" で取り込むファイル: ソースコードのディレクトリの下
へッダをインクルードする仕組	/57 20/57 口関数の汎用性 p.159	21/57 □ 配列の受け渡し p.160
C プリプロセッサ (通称 cpp) の機能 コンパイル前に cpp が呼び出される ■ 入力: C 言語のソースファイル ■ 動作: ファイル中の #include 文をヘッダの内容に置き換え ■ 出力: (等価な) C 言語のソースファイル cpp が出力したソースファイルを C コンパイラ本体がコンパイル 他の cpp の機能 ■ マクロ定義 #define 文とマクロ展開 ■ 条件コンパイル #ifdef 文 ■ 条件コンパイル #if,#else,#endif 文	List 6-10 (部分): 関数 top int top(void) { extern int tensu[]; /* 配列の宣言(省略可)*/ int max = tensu[0]; for (int i = 1; i < NUMBER; i++) if (tensu[i] > max) max = tensu[i]; return max; } これでは汎用性に欠ける ■ 配列 tensu と 要素数 NUMBER に決め打ち 対象の配列と要素数に自由度があると利用範囲が増える ■ 引数で渡せるようにするとよい	List 6-11 (部分): 配列を引数とするプログラム例 int max_of(int v[], int n) {
22	/57 23/57	24 / 57

```
★重要★
□ 配列の受け渡しと const 型修飾子 p.162
                                       27 / 57
```

引数の配列の使用 関数に渡された配列

List 6-11 (部分):要素数 n の配列 v の最大値を返す

```
int max_of(int v[], int n)
 int max = v[0];
 for (int i = 1; i < n; i++)
   if (v[i] > max)
     max = v[i];
 return max;
```

top よりも汎用性が高い

- 対象の配列と要素数を引数で指定できる
- 他の配列での最大値を求めるのに使える

```
int max_of(int v[], int n)
    ....略....
```

仮引数に与えられる配列: 呼び出し側の実引数の配列そのもの

- 関数内で配列の要素の値を変更 ⇒ 呼び出し元の配列の値も変化
- ·main 関数での呼出 max_of(eng, NUMBER): max_of() の仮引数 v[] は配列 eng[] に
- v[0] は eng[0] と同一 (同じメモリアドレス)

List 6-11 (部分):要素数 n の配列 v の最大値を返す

■ v[1]. v[2]. ... も同様

·main 関数での呼出 max_of(mat, NUMBER): max_of() の仮引数 v[] は配列 mat[] に

- v[0] は mat[0] と同一 (同じメモリアドレス)
- v[1], v[2], ... も同様

25 / 57

28 / 57

const 型修飾子

値の変更禁止をソースコード上で明示する方法 関数内で代入をするソースコードをコンパイルエラーにする

const なし:配列の内容を呼び出した関数内で書き換えできる

■ 関数内で配列の要素の値を変更 ⇒ 呼び出し元の配列の値も変化

配列の内容を変更されては呼び出し元が困る場合もあり

- 知らずに関数内部で書き換えてしまうコードを書くかも...
- 解決法: const 型修飾子の導入

線形探索のコード例

const 型修飾子の使用例

List 6-12 (部分):配列の内容を表示する関数

```
void print_array(const int v[], int n)
  printf("{ ");
 for (int i = 0; i < n; i++)
printf("%d ", v[i]);
 printf("}");
```

仮引数 const int v门

- 関数内での値の変更を禁止
- 変更 (代入) するプログラムコードを書けばコンパイルエラー

関数 print_array を呼び出す側

■ 配列の内容が変更されない保証を得る

□ 線形探索 (逐次探索) p.164

関数 search: 配列 v 中の値 key を探索して一致する添字を返す

返す値 i の条件: v[i] = key が成立

■ 存在しなければ -1 を返す

```
0 1 2 3 4 5
  81 2 68 15 91 28
kev=68
```

どうやって実現する?

- i=0,1,2,... としながら
- もし v[i] = key なら i の値をリターン
- ただし配列の終わりに来る (見つからない) と終了: -1 を返す

List 6-13 (部分): 配列 v 中の値 key を探索して添字を返す

```
#define FAILED -1 /* 探索失敗 */
int search(const int v[], int key, int n)
 int i = 0:
 while (1) {
   if (i == n)
    return FAILED;
                    /* 探索失敗 */
   if (v[i] == key)
                     /* 探索成功 */
    return i;
   i++;
 }
```

29 / 57

26 / 57

30 / 57

呼出 □ 番兵法 p.166 番兵法 List 6-13 (部分):線形探索の main 関数 探索値の判定とループ終了判定を同時に行うプログラミング技法 List 6-14: 配列宣言に注意 (番兵用の要素を確保) ■ 探索対象の配列 v は要素数を1つ余分に確保(要素数 n+1) int main(void) #define NUMBER 5 /* 要素数 */ ■ 配列の最後の要素 v[n] に探索値 key を代入して探索開始 int kv. idx: int main(void) List 6-14: 番兵 int vx[NUMBER + 1]; //★番兵用の要素を確保★ ... 略(配列の値と探索する値を入力) ... int ky, idx; int search(int v[], int key, int n) if ((idx = search(vx, ky, NUMBER)) == FAILED) int vx[NUMBER]; puts("\a探索に失敗しました。"); int i = 0; ... 略(配列の値と探索する値を入力) ... v[n] = key; /* 番兵を格納 */while (1) { printf("%dは%d番目にあります。\n", ky, idx + 1); return 0: idx = search(vx, ky, NUMBER); /*配列vxからkyを探索*/ if (v[i] == key) if (idx == FAILED) break; puts("\a探索に失敗しました。"); ひとつ多く要素を確保 return i < n ? i : FAILED; printf("%dは%d番目にあります。\n", ky, idx + 1); vx[0] return 0: vx[1] 実行時間の高速化に有効:比較だけで探索を終了(ループ終了判定なし) ■ 検索値がない: v[n]=key で必ず終了 vx[0] からここまでを入力値の記憶に使用 ■ vx[NUMBER-1] ■ 検索値がある: v[i]=key (i < n) で終了 ■ vx [NUMBER] ここが1つ多い... 番兵用に使用 31 / 57 32 / 57 33 / 57 注意 (番兵法) if文の条件式の解説 □ 多次元配列の受け渡し p.170 if 文 正しく読みやすいプログラムを書けるようなるのが先決 List 6-16 (部分): 多次元配列を関数に渡す ■ 高速化の技巧はその後に考えること if ((idx = search(vx, ky, NUMBER)) == FAILED) ... int main(void) int tensu1[4][3] = { {91, 63, 78}, {67, 72, 46}, 条件式だけに注目: バグありプログラムをどんなに高速化してもバグありのまま {89, 34, 53}, {32, 54, 34} }; int tensu2[4][3] = { {97, 67, 82}, {73, 43, 46}, ((idx = search(vx, ky, NUMBER)) == FAILED) (17, 56, 21), (13, 43, 46), (97, 56, 21), (85, 46, 35) }; int sum[4][3]; /* 合計 */ 分かりにくいプログラムは高速化する途中でバグを仕込んでしまう ■ バグ取りきれなくて修羅場なのがおやくそく mat_add(tensu1, tensu2, sum); /* 合計を求める */ 条件式の構造: ((v = f()) == X) puts("1回目の点数"); mat_print(tensu1); puts("2回目の点数"); mat_print(tensu2); 条件式の値の計算実行の流れ puts("合計点"); mat_print(sum); return 0; ■ 関数の呼び出し: f() 2 変数への関数値の代入: v=... 2 次元配列 (4 行 3 列) 3 代入された値と X との比較: (...) == X 関数呼び出し時の実引数: 配列名を指定 条件式の値 if 文の条件式の真偽が決定 (0: 偽, 非 0: 真) 34 / 57 35 / 57 36 / 57

```
★重要★
多次元配列を引数とする関数の例 (1/2)
                                                     多次元配列を引数とする関数の例 (2/2)
                                                                                                            多次元配列の仮引数
  List 6-16 (部分): 4 行 3 列の行列 a と b の和を c に格納
                                                        List 6-16 (部分): 4 行 3 列の行列を表示
                                                                                                               n次元配列の仮引数の書き方
  void mat_print(const int m[4][3])
                                                                                                                ■ n-1次元目までは要素数の指定が必須
                                                          for (int i = 0; i < 4; i++) {
                                                                                                                ■ n次元は要素数の指定はしなくてもよい
    for (int i = 0; i < 4; i++)
                                                            for (int j = 0; j < 3; j++)
     for (int j = 0; j < 3; j++)
c[i][j] = a[i][j] + b[i][j];
                                                             printf("%4d", m[i][j]);
                                                             putchar('\n');
                                                                                                              List 6C-1 (部分): 関数 mat_print の仮引数の別の書き方
                                                                                                              void mat_print(const int m[][3], int n)
                                                                                                              (仮引数の場合) int m[4][3] を int m[][3] と書いても同じ
                                                                                                              例: 4 行 3 列の 2 次元配列の仮引数の書き方 (2 通り)
                                                                                                                ■ int m[][3]:1次元目まで要素数を指定(2次元目を省略した場合)
                                                                                                                ■ int m[4][3]:2次元目も要素数を指定
                                               37 / 57
                                                                                                     38 / 57
                                                                                                                                                           39 / 57
                                             ★重要★
                                                                                                                                                         ★重要★
多次元配列の仮引数 (2)
                                                                                                            口 有効範囲と識別子の可視性 p.172
   関数 mat_print は以下の呼び出しができる
                                                                                                              List 6-17: 識別子の有効範囲 (scope) の例
  int x[2][3];
int y[4][3];
                                                                                                              int x = 75; /* A:ファイル有効範囲 */
                                                                                                              void print_x(void)
   mat_print(x, 2);
                                                                                                              printf("x = %d\n", x);
  mat_print(y, 4);
                                                                                                                                         /* → A を参照 */
                                                               第6-3節 有効範囲と記憶域期間
    ■ 仮引数を m[][3] と宣言しているため
                                                                                                               int main(void)
                                                                                                                int x = 999; /* B : ブロック有効範囲 */
   再掲 List 6C-1 (部分): 関数 mat_print の仮引数の別の書き方
                                                                                                                print_x();
   void mat_print(const int m[][3], int n)
                                                                                                                printf("x = %d\n", x);
                                                                                                                                         /* →Bを参照 */
                                                                                                                for (int i = 0; i < 5; i++) {
      ... 略 ...
                                                                                                                 int x = i * 100; /* C : ブロック有効範囲 */
                                                                                                                 printf("x = %d\n", x); /* → C を参照 */
                                                                                                                printf("x = %d\n", x);
                                                                                                                                         /* → B を参照 */
    ■ もし仮引数の宣言が m[4][3] だと x を引数に出来ない
                                                                                                                return 0;
                                               40 / 57
                                                                                                     41 / 57
                                                                                                                                                           42 / 57
```

★重要★ 同名の変数がある場合 (1/2)	同名の変数がある場合 (2/2)	★重要★	□ 記憶域期間 (strage duration)	重要★
規則 1: ファイル有効範囲とブロック有効範囲 両方に同名の変数が存在する場合: プロック有効範囲の変数が有効となる 例: List 6-17 (部分) — 2 つの変数 x int x = 75;	規則 2: 入れ子のプロック有効範囲 両方に同名の変数が存在する場合: より内側の変数が有効となる 例: List 6-17 (部分) — 2 つの変数 x int main(void) { int x = 999; /* B : プロック有効範囲 */ for (int i = 0; i < 5; i++) { int x = i * 100; /* C : プロック有効範囲 */ printf("x = %d\n", x); /* → C を参照 */ } return 0; }		変数がいつ利用可能になり・いつ消滅するかを表す概念 ■ 変数の生存期間 (寿命) ■ 最初から最後まで存在し続けるわけではない ■ あるときに生まれ、あるときに消える C 言語では 2 通り:自動記憶域期間と静的記憶域期間	
43/57 自動記憶域期間	静的記憶域期間	44 / 57 ★重要★	C 言語の変数の記憶域期間: まとめ	45 / 57
振る舞いの直感: 以前に関数を実行したときの変数値は失念 自動記憶域期間 (automatic strage duration) 変数の宣言方法: 関数 (プロック) 中で auto(省略可)を付加 ・変数の生成: プログラムの流れが宣言を通過するとき ・変数の消滅: プログラムの流れがプロックを抜けるとき 初期値: 明示的に与えられなければ未定義 ■ 例 1: auto int x; ■ 例 2: int x; ■ 例 3: int x = 0; 注意: 初期値は明示的に与えられなければ未定義 ■ 実行の度に初期値が違う可能性あり ■ 性質: 前回の値を覚えていない	振る舞いの直感:以前に関数を実行したときの変数値を記憶 静的記憶域期間 (static strage duration) 変数の宣言法: 関数 (プロック) 中または関数外で static を付加 ・変数の生成: プログラムの実行開始時 (main 関数実行前) ・変数の消滅: プログラムの実行終了時 初期値: 明示的に与えられない場合は 0 ■ 例 1: static int y; ■ 例 2: static int x = 256; 注意: 変数宣言文を 2 回以上実行する場合 ■ 実行の度に代入するのではない ■ 初期化はプログラム起動時の 1 度だけ ■ 性質: 前回の値を覚えている		自動記憶域期間	
46 / 57		47 / 57	4	48 / 57



